

ちばパートナーシップ市場事業 自己評価チェックシート

事業名 ; 県立中央博物館における県民と専門家による「千葉の干潟展」開催事業

チェック項目	提案団体		県関係課			
	千葉まちづくりポータルセンター		中央博物館	教育庁文化財課		
1. 協働事業の詳細を協議するにあたって「千葉県パートナーシップマニュアル」の示す協働の進め方や留意事項を参考としましたか？	○	これが協働事業のよりどころだと重要に思っていたから。	○	事業の概要を把握することができた。詳細は、NPO活動推進課担当者から説明をして頂けた。	△	事業を進めるにあたり、中央博物館、NPO、県関係課で構成される実行委員会会議で協議を進めたが、同会議に出席していただいたNPO活動推進課担当者から適切なアドバイスをいただいたことから、マニュアルを見る機会が少なかった。
2. パートナーシップを築くことができましたか？						
(1) パートナーシップの考え方や協働事業の取り組み方などを確認し合いましたか？	△	NPOの準備会で協働事業で取り組むことを説明し、呼びかけに応じてくれた方々に確認した。言葉の上では理解していたが深い理解はむずかしい。	○	平成17年からの話し合いで、およその確認はしていた。	○	平成17年度から開始した打合せにおいて、事業の目的及びパートナーシップの考え方のアウトラインについて確認できた。
(2) お互いの立場、おかれている状況、特性（得手・不得手）などを理解しましたか？	△	中央博物館が地域やNPOとともに地域の課題に取り組むとあったので、そのまま理解していた。博物館の人は企画展や製作や展示は得手だろう、しかし、県民とのコミュニケーションは不得手かもしれないと理解していた。	△	平成17年からの話し合いで、お互いの立場、おかれている状況は理解されたが、具体的な展示作業に関する特性は、理解できていなかった。	○	平成17年度から6回にわたり協議を重ね、取組の方向性等を確認したが、具体的作業について理解に至らなかった点があった。
(3) これまでの協議は対等で協力的に行えたと思えますか？	△	事前の担当者打ち合わせ会議の時はポータルセンターが少し高圧的だったかもしれない。	○	NPO側の発言力がやや強かったようである。	○	協議は対等で協力的に行えた。
(4) 共有すべき課題、互いの果たすべき役割・目標、協働事業効果、事業成果の帰属（取り扱い）等について確認できましたか？	◎	これらを明記した契約者を取り交わした。	○	目標の確認（「干潟展の開催」と「干潟展を通して博物館と市民の協力のモデルをつくる」）が確認されたうえ、実施体制、役割分担協議された。	○	事業開始前の協議において、互いの果たすべき役割・目標、協働事業効果、事業成果の帰属について確認をとったが、具体的作業の分担についての打合せが不足していた。
3. 協働事業開始前の打ち合わせ会議は役に立ちましたか？ (会議の目的の理解や会議の方法などはどうでしたか？)	◎	協働事業の実施に向けて、前向きに対応してくれた。会議の詳細な記録を作ってくれたので、プロセスも思い出せた。	○	概要としては、役にたったが、具体的な展示作業の直接担当者を会議のメンバーに加えて行った方がよかった。	◎	事業に着手前に、観察会の実施方法やNPOが協働事業に期待することをある程度確認することができ、スムーズに契約を締結することができた。

協働事業  
開始前

事業名 ; 県立中央博物館における県民と専門家による「千葉の干潟展」開催事業

チェック項目	提案団体		県関係課	
	千葉まちづくりセンター	中央博物館	中央博物館	教育庁文化財課
1. 連携の状況や進捗の把握はどうでしたか？				
(1) 必要に応じて打ち合わせ(協議)を行いましたか？	○ ( 実行委員会4回 担当者会議・企画・製作・展示・広報・催事他7回+10回) 事業内容が多く、形態も多様で、NPOと専門家とのうちあわせ不可欠だったので。 しかし、12月のシナリオ決定の委員会は持てずに、MLでの対処となった。	○ 実行委員会4回、部会7回(合計11回)の会議を行い、企画、展示の具体的な課題について打ち合わせをしながら進めた。ただし最終的な展示内容の確認ができなかった。	○ (実行委員会：4回、部会7回)中央博物館、NPO、県関係課で構成する実行委員会会議を定期的で開催するとともに、企画、展示、などの部会を設置し、個別具体的な課題について打合せをしながら進めた。最終的な展示内容の確認ができなかった。	
(2) 事業の中間報告や、県担当課職員が現地に赴くなど、パートナー双方が進捗状況を確認したり、自由な意見交換を行いましたか？	○ (報告；常時・現地確認 展示室下見2回ほか 地域の干潟8回) この事業における現地とは、干潟と博物館の両方であるという認識を双方がもてないところもあった。	△ NPO側の現場の見学会(企画展展示および企画展の準備作業)の機会をもっと多く持っていたら良かった。夜間の行われる会議のみでは、展示の実際および準備作業の様子などが把握されなかったと考える。事前会議に提示されていた土・日(昼で開館している時間帯)の会議が、全会議の3分の1ほどは必要だった。	○ (報告； 回・現地確認回) 県内3地区で行った観察会、展示、シンポジウムなどあらゆる局面において、県とNPOがともに行った。なお、NPO側に展示室の下見をする機会が充分になかった。	
(3) 当初想定しなかった新たな課題などを共有できましたか？	○ 新たな課題の連続だった。同じ県立でも博物館によって展示への考えが違ったり、煙蒸が必要だったり、一つずつ、話し合っただけで対応していただいた。専門性を優先した方が良い所は従い、やっと開催、終了まで漕ぎついた。	△ 特に、展示製作段階で、計画にはなかった若しくははっきりしていなかった参加体験型展示に関して、博物館側が多くの労働力を提供せざるを得なかった。NPO側にも適性のある人材もいた筈であることは、後になってわかった。	○ 第2企画展示室、廊下での展示について、具体的内容を決定するのに時間を要した。	
(4) 当初の事業内容や協議事項に変更が生じた際、柔軟に対応できましたか？	○ 机上での展示プランが展示室の現場では変更せざるを得ないことがあった。そのほうが展示として良くなるのが納得できたので、展示の専門性の高い研究員の指示に従って結果が良かった。	△ (3)に同じ	○ 当初の事業内容から大きな変更はない。	
(5) 打ち合わせ事項(合意事項)は記録に残し、共有しましたか？	○ 打ち合わせ記録を残しMLで共有した。	◎ 議事録がしっかりしていた。	◎ 実行委員会会議、各部会の打合せ記録をメーリングリストにより関係者全員に配布され、共有できた。	

協働事業  
実施中

事業名 ; 県立中央博物館における県民と専門家による「千葉の干潟展」開催事業

チェック項目	提案団体		県関係課	
	千葉まちづくりセンター	中央博物館	中央博物館	教育庁文化財課
<p>協働事業 実施中</p> <p>2. 中間ふりかえり会議は役に立ちましたか？</p>	○ 干潟現地での調査・観察会がほぼ終了した時期に、その報告と、展示資料の進捗状況、これからの展示開催へのスケジュールが示された。博物館からスケジュールが遅れているとの指摘があった。タイムリミットを感じて、気分が展示へ切り替わっていった。現実的なふりかえりとなった。	△ 会議の回数は多かったが、特に中間ふりかえりを目的とした会議は行われなかったように思う。	○ 実行委員会4回、部会7回を開催し、その都度作業の進捗状況及び今後の作業予定を確認したが、細かい作業分担の打合せが不足した。	
<p>協働事業 終了後</p> <p>1. 捉えた課題の克服やニーズに応えることはできましたか？ －審査基準；課題の把握の的確性－</p> <p>2. 協働事業における役割や責任分担、資金負担は適切でしたか？ －審査基準；役割分担の的確性・実施体制・経費の積算－</p> <p>3. 協働の形態（補助・委託・負担金など）は適切でやりやすかったですか？</p>		○ 「子どもたちの意見も取り入れるような事業内容」ということについて、緑海小学校の「河口と干潟の環境学習」というコーナーを設け、学習成果を取り入れるなど、学校との連携を図った。	◎ 「子どもたちの意見も取り入れるような事業内容」ということについて、緑海小学校の「河口と干潟の環境学習」というコーナーを設け、学習成果を取り入れるなど、学校との連携を図った。	
		△ 展示の実際作業段階での役割分担が博物館側に過重であった。NPO側からの適性ある人材の選出が必要である。また、展示作業への保険などが積算されていなかったこともネックであった。	○ 観察会から展示企画を大まかに役割分担できたが、展示作業の細かい作業について打合せが充分に行えず、NPOの工作等を得手とする人材の活用が遅れた。	
	○ 前払い	○ 委託以外の方法は適していないと考えられる。	◎ 事業の内容から委託以外の方法は適していないと考えられる。	
<p>4. 協働事業の効果はどうでしたか？</p> <p>(1) 相手方に求めた役割（自分にはない専門性やノウハウなど）は期待どおりでしたか？</p>	○ 期待がすれちがっていたりしたこともあり、応えられない点をよくカバーしてくれた。	○ 実物の資料などでは、期待とは異なっていた。しかし、写真資料、飼育展示などでは、良いものが得られた。また、一部の市民団体にはすぐれた情報を有するものもあり今後の交流のなかでは成果が期待される。	◎ NPOがもつ地域でのネットワークを十分に活用した観察会、展示、シンポジウムが開催できた。	

事業名 ; 県立中央博物館における県民と専門家による「千葉の干潟展」開催事業

チェック項目	提案団体		県関係課	
	千葉まちづくりポータルセンター	中央博物館	中央博物館	教育庁文化財課
(2) 協働で事業を実施したことは、単独で事業を実施するよりも、県民にとって効果があったと思われましたか？ －審査基準；協働の効果・モデル性からの成果－	◎ NPOからの提案事業を博物館が協働で取り組んだことに、博物館の近代化が感じられる。始めから満足にはできないが、協働の体験を通して県民も育っていく。展示を作る側の視点を持ち、博物館の業務や使命に理解が深まった。	○ 博物館の役割が、参加した市民グループを核にして広がっていくという効果があったと思う。	◎ NPOがもつ地域でのネットワークを活用し、さらに参加した市民グループを核に参加者を広げることができ、予想以上の集客があった。	
(3) 広く県民に事業への参加を促したり、事業の効果を広報し、県民の協力や理解がえられましたか？ －審査基準；県民参加等の工夫－	◎ 事業への参加呼びかけを、チラシ、H.P.、口コミで広域に行った。大勢の方の多様な協力や理解が得られた。	◎ 各地域グループを核として、参加がなされた。広報も地方の情報誌などに幅広く行われた。	◎ あらゆる機会を捉えて互いに広報を行った。また、NPOがもつ地域でのネットワークを活用し、さらに参加した市民グループから人づてで参加の呼びかけを行うことができた。	
(4) 協働の相手方双方に効果やメリットがありましたか？	(自団体) 今回は博物館の展示を作る側の見方や業務を体験して、いままでよりも博物館業務や展示への理解が深まった。 (相手方) 飛び込み企画で負担が大きかった。日曜大工や絵心の得意な人が向いているとのこと。	◎ (自団体) 今後、中央博所蔵の写真資料に関する情報得られる市民がみつかったというメリットがある。 (相手方) 協働の展示により、博物館が以前より身近に感じられるようになったと思う。	○ (自団体) 地域の人材を発掘することができた。 (相手方)	
(5) 事業の効果は、複数の市町村に及ぶものでしたか？ または、広く他の地域で応用活用することにつながるものでしたか？ －審査基準；広域性・波及性－	◎ これまで東京湾干潟に加えて、今回は外房の干潟からも参加、出展して広域市町村に及んだ。また、干潟展には小学校から大学院生、大人まで大変幅広い世代が関わったため、入場者も幅広い世代を呼び込んだ。今後も、今回作成配布した「千葉の干潟マップ」を持って身近な干潟を訪ねたり、小さな干潟探しにつながると考えられる。	○ 「千葉の干潟」というテーマは、広く複数の市町村に及んでいる。特に今回配布資料として作成した干潟展マップには、千葉県に注ぐ河川名を全て表示しているが、東京湾岸のみでなく外房、九十九里浜に注ぐ河川の河口付近にも干潟が存在していることを示しており、広域性が高いといえる。	◎ 千葉の干潟をテーマとして、三番瀬、盤州、外房地域の県内3か所での観察会を実施し、その成果を取り入れた展示、シンポジウムの開催、県内の干潟マップの刊行など、県内全域で応用活用できるものである。	
(6) 事業の成果を情報発信するなど、その成果を広く県民と共有できるよう取り組みましたか？	◎ 放送、新聞、雑誌、タウン情報紙、チラシ、ポスター、テレビ、中央博物館のHP、会の機関紙、会のHP	◎ (3)に同じ	◎ チラシ、インターネットを中心にあらゆる機会を捉えて広報活動を行った。また、NPOがもつ幅広い広報手段を活用した情報発信が行えた。	
5. 当初設定した成果目標は達成できましたか？ また、合意事項は適正に履行できましたか？	○ 課題は多かったが専門家とNPOの干潟展が実現した	○ 協働の在り方については、今後検討すべき点はあるが、市民とのつながりが実感できた。	◎ 展示期間中に約5,000人の入場者があり、シンポジウムにも161が参加があり、成果目標は達成できた。	

協働事業  
終了後

事業名 ; 県立中央博物館における県民と専門家による「千葉の干潟展」開催事業

チェック項目	提案団体		県関係課	
	千葉まちづくりセンター		中央博物館	教育庁文化財課
6. 協働事業をふりかえて思ったことは何ですか？				
(1) 当初考えていた協働事業のイメージどおりでしたか？			○ 展示製作の作業に関しては、博物館側の負担が過重で協働のイメージとは異なった。しかし、それ以外の部分では、協働で得られたものもあった。	○ イメージどおりである。
(2) 協働事業をやって良かったと思いますか？	○ 大変だったがNPOの実行委員がやって良かったと言っている。		○ 博物館単独では得られない市民とのつながりが芽生えた。	○ 良かった。
(3) 協働事業を実施する中で、難しいと思ったところはありましたか？	NPOが製作したり、展示資料を置く部屋がない。		展示製作の実際の作業。	
(4) 自分たちが「こうしたら良かった」と思う点はどんなところですか？	大きな張りパネ作りの技術		企画の立案者と実際の担当者間での、もっと多くの意思疎通に時間をかけるべきであった。あるいは昨年度の企画段階で、実際に担当になる可能性の高いメンバーを加えた会議がもたれていたら、良かった。	博物館実習的な時間を設定すれば、具体的な展示作業がよりスムーズに行えたと思われる。
(5) 相手方に「こうして欲しかった」と思う点はどんなところですか？			展示製作作業に、適性のある人員を数名程選抜して、展示のために必要な道具の位置を覚えて頂くとか、今年度に入ってから数回の展示の準備を見学する機会を設け、展示がどのような準備の後、展示を作業に加わっていただきたかった。また、展示には、高所での作業や刃物を扱う、重量物の移動など危険も伴うので、携わる人の保険の手配が欲しかった。	
(6) 今後も協働事業を行いたいと思いますか？			○ 県民に身近な博物館となっていくため、協働事業は必要と感じる。ただし、展示事業に関しては単年度でなく3年以上はかけてほしい。展示以外の調査などで、協働事業を模索すべきであると思う。	○ これからの博物館は、県民の視点に立ち、そのニーズを的確に把握するとともに、NPOなどとのパートナーシップのもとで事業を企画・運営していくといった姿勢が強く求められている。NPOなどの自由な発想を活かし、県民に身近な博物館とするため、より一層パートナーシップを強化する。

協働事業  
終了後

事業名 ; 県立中央博物館における県民と専門家による「千葉の干潟展」開催事業

チェック項目	提案団体		県関係課	
	千葉まちづくりセンター	中央博物館	中央博物館	教育庁文化財課
7. 自己評価チェックシートや評価は事業（活動）の改善に役立ちましたか？				
(1) このシートを用いて評価した内容は、事業の改善につながりましたか？	?		<input type="radio"/> このシートのより簡便なものが、事業の開始とともにあればよかった。	協働のプロセスについて、再度確認することができ、どの段階でどのような共通認識を図るべきかということを確認できた。
(2) このシートを用いて評価した内容を新たな事業の企画や既存の事業（活動）の見直しに生かすことができましたか？	?	終わったばかりなので、これから活かします。	<input type="radio"/> (1)に同じ。	
(3) このシートは協働事業の円滑な運営に役立ちましたか、またシートチェック項目などはわかりやすかったですか？		一つの欄に2つ以上の問いがあると達成度が答えにくい。数が多すぎる。	<input type="radio"/> 重複する内容などが多いのではないか。	事業の最終段階でチェックシートを記入することになったため、事業開始前の項目の達成度判断理由が曖昧なものとなった。

協働事業  
終了後